

氷積の章

尾池和夫選

2026年5月号

霞袂集

はて何の狼藉の跡うすごほり  
町内の豆腐屋に寄る春コート  
奈良町や残る寒さのくくり猿  
みづうみに裾を沈めて山笑ふ  
石像の鷹身じろがず春の雷  
植木鉢置きなほしたる雨水かな

尾池葉子  
大島幸男  
長野眞久  
原 稔  
古川 邑秋  
大口 彰子

氷凌集

角ぐみし鶺鴒殿の葦や萱鼠  
よき蘆舌なせよと守る野焼かな  
茶室にて白湯所望する余寒かな  
目覚めゆく山河まざまざ春の雨  
溪流をまたぐ廊下や冴返る  
庵跡に良寛椿落ち急ぐ

竹中教子  
西五辻芳子  
河村純子  
佐藤美智子  
真下章子  
木村静子

氷積の章

尾池和夫選

2026年4月号

霞袂集

棘の木の棘隠しえず雪に折れ  
射的屋に児の並びある残り福  
しづやかにゐて牛日の地震ひとつ  
極月や古き旅籠の格子窓  
正面にみづうみ展け初景色  
日の出づる海に背を向け初鴉

尾池葉子  
大島幸男  
長野眞久  
三和幸一  
原 稔  
余米重則

氷凌集

二日はや施粥の札に修行僧  
日脚伸ぶ妻の帰宅の遅くなり  
世の中と繋がる幅に雪を掻く  
積石の温みに添うて仏の座  
福男転んでも勝つ初戎  
福が飛ぶ吹くなど言うて小豆粥

城島千鶴  
重富國宏  
大野邦夫  
渋谷啓子  
西五辻芳子  
南田美恵子

氷積の章

尾池和夫選

2026年3月号

霞袂集

日本海波立つ十二月八日  
ことさらに渋き貌する襦袢かな

尾池葉子  
大島幸男

おん祭夜に入る風の尖りきて  
極月の川を流るる新聞紙  
消えし夢まだ見ぬ夢や年の暮  
トランプのジョーカー行き来冬の夜半

長野眞久  
三和幸一  
原 稔  
大口彰子

くつきりと鹿の足跡池の底  
陶片を継ぐ人のもと能登の冬  
セーターに都会の匂ひ持ち帰る  
顔見世やかぶりつきより八代目  
雪しんしん天のごきげんみる日かな  
冬うらら野に立つおほき藁の馬

氷凌集  
城島千鶴  
河村純子  
大野邦夫  
西五辻芳子  
高橋千画子  
酒井富子

氷積の章

尾池和夫選

2026年2月号

白龍となり山越ゆる冬の霧  
冬の蝶風の死角を見つけたる  
憂しき世のみな裏返り朴落葉  
小春日や庭師の影が行き来して  
河豚鍋や海より昏るる浜の宿  
枯木星一つ見つけて門を閉づ

霞袂集  
尾池葉子  
大島幸男  
長野眞久  
三和幸一  
原 稔  
余米重則

麦の芽や赤城裾野の風荒ぶ  
摘み取るをためらはれたり返り花  
窓際に雨宿りして時雨虹  
茶の花や頭を垂るる躡り口  
天文台よりアベノハルカス秋惜しむ  
夫の忌を修して仰ぐ冬銀河

氷凌集  
渋谷啓子  
大野邦夫  
南田美恵子  
西五辻芳子  
羽鳥正子  
酒井富子

氷積の章

尾池和夫選

2026年1月号

酔みかんの名を直七と土佐の秋  
ひと声に終はる虫の音雨ひそか  
豊年や土偶がほうと口開けて  
岩礁を這ふ巻貝に月明り  
長き夜や土版の穴の数の謎  
稲妻が水平線を歪ませて

霞袂集  
尾池葉子  
大島幸男  
長野眞久  
余米重則  
古川邑秋  
大口彰子

秋高し火伏せ大樹の本能寺  
路線バス通らぬ村や秋深し  
今日ここの明日はいづこの稲刈機  
ひとにぎり夕日の温み種を採る  
鳥渡る上越連山越えて来て  
尉鶴庭に来てをり雨なれど

水凌集  
城島千鶴  
大野邦夫  
南田美恵子  
遠藤長代  
羽鳥正子  
佐藤美智子